

呼び声』(〇三)と『白い牙』(〇五)は高学年の児童にも愛読されている。『野性の呼び声』はカリフォルニアの判事邸で飼われていたバックが、北方労役犬として売られ、橇犬としての厳しい労働と疲労の日々を送るうちに、その中に眠っていた野性の本能が呼び覚まされ、ついには狼の群れに身を投じる姿を描いたものである。他方、『白い牙』では野性の狼と犬の混血であるホワイト・ファンクが、バックとは逆に、人間に飼われることによってしだいに狼から犬化していく姿が描かれている。

(桂 有子)

ワ

ワイズガード レナード Leonard Weisgard 一九

一六〇 アメリカの画家、イラストレーター。プラト・インステイテュートに二年在学して退学、商業美術、ダンス修業ののち、児童書の創作、イラストレーションに転じ、多彩な画材、技術を駆使し、多くの優れた作品を生む。『The Little Island 小島』(一九

四七)でコールデコット賞受賞。『Mr. Peaceable Prints ピーサブル氏絵を描く』(五六)の原画は、ソビエト、中近東諸国にて巡回展示された。

(渡辺茂男)

ワイルター ローラ インガルス Laura Ingalls

Wilder 一八六七—一九五七 アメリカの作家。ウィスコンシン州の開拓農民の娘として生まれ、子ども時代は幌馬車で中西部一帯を渡り歩く生活を送った。一八歳で結婚してからはミズーリ州に落ちつき、やがて自らの少女時代、娘時代の思い出をもとにした物語を書きはじめる。「小さな家」シリーズがそれである。第一作目『大きな森の小さな家』(一九三三)はウィスコンシンの森の中の幼年時代を描写したもので、簡潔な語り口ながら当時の開拓民の生活ぶりを微細に描写し、作者自らの像をローラと名づけて、厳しい自然と闘いながら一家を支えていく両親の姿を通して成長する主人公のありさまに焦点を当てている。二作目の『大草原の小さな家』(三五)になって、一家の移住生活が始まる。森を抜け川を渡る幾多の苦難の模様は、作者の現実の体験を背景にしている。それは『ブラム・クリークの土手で』(三七)という三作目でも如実に描かれている。ローラの姉メアリーに襲いかかる悲運を描く『シルバー・レイクの岸辺で』(三九)、吹雪にさらされる一家を写実的に描く『長い冬』(四〇)などは物語作家としてのワイルターの資質がみごとに出了た作品。『大草原の

小さな町』(四二)、『この楽しい日々』(四三)、そして作者の死後発見された草稿による『最初の四年間』(七一)はローラの独り立ちと結婚を扱う。結婚の相手は『農夫の少年』(三三)に登場する少年である。以上九編よりなるシリーズは、主人公ローラの外面的成長とともに内面的な成長を緻密に追いながら、家庭というものとの在り方を立体的に前面に押し出した優れた家庭小説になっている。と同時に、開拓農民に支えられたアメリカ建国の精神を浮き彫りにさせている点で見逃せない。

(定松 正)

ワイルド オскар Oscar Wilde 一八五四—一九〇〇 イギリス世紀末の唯美主義の作家で、童話に『幸福な王子』その他の物語』(二八八)の五編、『柘榴の家』(九一)の四編の計九編がある。いずれも散文の詩というべき美しい文章でつづられ、アレゴリカルなテーマをもっている。中で最もよく知られ、完成度も高いのが『幸福な王子』で、銅像となって今人に仰ぎみられる王子が、この時になってはじめて人々の悲惨を知り、ツバメの助けを得て文字通り身をはいで人々を救う話は、その愛と自己犠牲のテーマが、最後の王子の昇天と合わせて、よく「イギリスのアンデルセン」ともいわれる作風をつくり出している。ツバメが夢にみるはるかなイル川の描写にみられるエキゾティシズム、王子と対照的な俗物の政治家に向けられた鋭い風

刺も、ワイルドらしいものである。なお、この愛と献身というテーマは、『わがままな巨人』や『ナイチンゲールとバラ』などをはじめ、『星の子』『若い王さま』『漁夫とその魂』などにも続いている。ワイルドの作品には、キリスト教的なテーマやアレゴリカルな意味、それに皮肉な人間観などもあって、それは直ちに子どもに理解できるとは必ずしもいえない。しかしその種のモチーフは、愛と自己犠牲というメイン・テーマと響き合せて、子どもの心にもおのずとインパクトを与えたいえよう。

(谷本誠剛)

ワイルドスミス ブライアン Brian Wildsmith 一九三〇— イギリスの挿絵画家。化学を専攻し、数学教師を経て、絵画の道に入る。『The Oxford Book of Poetry for Children オックスフォード版児童詩集』(一九六〇)の挿絵を担当。華麗な色彩の厚塗りのグワッシュ水彩画法が特徴だが、一般の水彩のような透明感をもち、細部の描写に優れる。『ABC』(六二)でケイト・グリーン・ナウエー賞を受け、『とり』(六七)など動物を好んで描く。キーピング、バーニンガムと並び、第二次大戦後のイギリス絵本の黄金期を開く。

(藤森かよこ)

若杉 慧 さとし 一九〇三—八七(明36—昭62) 小説家。本名恵。広島県に生まれ、一九二二年広島師範卒業。四二年『微塵世界』で文壇に登場。戦後は健康的

な青春恋愛小説を多く発表、代表作『エデンの海』(一九四七)、『青春前期』(五五)でベストセラー作家となる。五八年写真集『野の仏』が石仏ブームの発端となり、以後多数の石仏関係書を刊行。七五年『長塚節素描』で平林たい子文学賞を受賞。八五年自伝作品『老幼夢幻』をまとめた。青少年少女小説に『いま来たこの道』(五〇)がある。(石崎 等)

若月紫蘭 わかづき 一八七九〜一九六二(明12〜昭37)

劇作家、演劇研究者。本名保治。山口県防府市に生まれ、一九〇三年東京帝国大学英文科卒業。〇八年に万朝報社に入社、二二年まで勤務、この間に翻訳の他、戯曲、劇評などを発表。一三年(大2)にメーテルリンクの『青い鳥』をわが国で初めて完訳。この翻訳は後に岩波文庫(一九二九)、岩波少年文庫(五二)に入り広く流通した。人形浄瑠璃史の研究者としても知られる。

(富田博之)

若林

勝 わかばやし

一九三四〜八〇(昭9〜昭55) 児

童文学作家。北海道函館市生まれ。炭鉱の町赤平での教師時代に文学教育・児童文学創作をはじめ、のちに東京で出版社に勤務する。文筆業に転じた一九七〇年創作『ズリ山』を発表したがこの作品の舞台となった赤平の赤間炭鉱は七三年に閉山となった。現代日本の現実と人間をみつめる目で書かれた『炭鉱よいつまでも』(一九七三)は炭鉱夫一家の流出と帰郷を描いて重

い主題となっている。

(加藤多二)

若松賤子 わかまつ

一八六四〜九六(元治1〜明29) 翻

訳家、作家。本名松川甲子。通称島田嘉志。岩代国会津郡若松(現・福島県会津若松市)に会津藩士松川勝次郎の長女として生まれる。一八七〇年生母病歿のため大川甚兵衛の養女となって横浜に移り、ミス・キダーの学校に学ぶ。在学中(二八七七)に宣教師E・R・ミラー

から洗礼を受け、キリスト教徒となる。八二年にフェリス女学校高等科を卒業し、同校の英語教師を務める。八六年五月、紀行文『旧き都のつと』をはじめ若松の筆名で『女学雑誌』に寄稿し、以後、『ロングフェロー』や『ミス・プロクター』の訳詩、外国の童話・逸話の翻訳などを同誌に発表。八九年七月、明治女学校の教頭であり、『女学雑誌』の編集兼発行人であった巖本善治と結婚。病弱なため病床で想を練りながら執筆活動を続け、『お向ふの離れ』(八九・一〇)、『すみれ』(八九・一〇)などの創作や、『プロクター』の『セーラーボーイ』の翻案小説『忘れ形見』(九〇・二)、テニソンの『イノック・アーデン』(九〇・二)の翻訳などを次々と『女学雑誌』に発表した。同誌において、小説は良い玩具のように人々の心に影響を与え、社会の矯風・教育の一助たり得るものである、という考えを明らかにしたのもこのころである。代表作となったバーネットの『小公子』の翻訳は、九〇年八月から九二年一月にかけて

「女学雑誌」に連載され、翻訳の巧みさと言文一致体を駆使した文章の秀逸によって高い評価を受けた。また、九四年ごろからは「日本伝道新報」に英文の作品も寄稿しており、英文遺稿集『巖本嘉志子』(九六)がある。教化主義的ともいわれるその作風は、キリスト教的倫理道徳を基盤とした、精神性の高いものである。九六年二月五日、夫善治が校長を務めていた明治女学校が焼失し、その五日後に持病の肺疾に心臓麻痺を併発して生涯を閉じた。

「小公子」しょうしゅう 原題 *Little Lord Fauntleroy* 翻訳小説。一八九〇年八月〜九二年一月「女学雑誌」に連載。九二年に連載の六回までが『小公子前篇』として女学雑誌社から、九七年に桜井鷗村によって全編が博文館から刊行される。原作はバーネット。英国の侯爵の遺児セドリックが、頑固で気難しい祖父の老侯爵とともに暮らすようになり、その純粹無垢な心で老侯爵の心を和らげるまでを描いた作品。作品の底流にある児童観と、「せんかった調」を用いた言文一致体の翻訳文によって、児童文学の先駆的役割を果たす作品と評価された。

【参考文献】山口玲子『とくと我を見たまえー若松賤子の生涯』(一九八〇 新潮社)、若松賤子刊行委員会編『若松賤子・不滅の生涯』(一九七七 共栄社出版) (長戸優子)

若谷和子わかや 一九四三〜(昭18〜) 詩人。本

姓武井。埼玉県与野市に生まれ、上野学園音楽学部声楽科卒業。詩人サトウハチローに師事。中学生のころから「木曜手帖」(一九五七)、サトウハチロー主宰)に詩を発表、将来を嘱望される。童謡集『小さい木馬』(六三)により、NHK児童文学賞受賞(六四)。「心のモザイク」(七七)ほか抒情詩集も多く、ミュージカルの訳詩もしている。現在NHKのみんなのうたを中心に活躍。

(宮中雲子)

若山 憲けんかやま 一九三〇〜(昭5〜) 絵本作家、評論家。岐阜県岐阜市美園町に生まれる。グラフィックデザインより童画へ、さらに絵本に進んだ。処女作には『きつねやまのよめいり』(一九六七)がある。『ぐまちゃん絵本』シリーズ(七〇)で知られ、「幼児に対する教育機能と物語る楽しさを融合させた」点が評価されている。現在も旺盛な創作活動を続けている。他面理論家としても一言を有し、絵本創作の姿勢を「ひらめき」におき、「ひらめき」を「あたため」「ふくらまして」と主張し、「絵本の文字は絵の説明文ではなく、絵が物語る」、絵で展開する絵本こそ真の絵本であるとする「純絵本」を提唱している。一九七三年から「月刊絵本」に連載した『わかやまけんのおしゃべり絵本講座』は明快で鋭い絵本論といえる。絵本の創作指導、講演など積極的に行っている。著書に『絵本の見かた 創りかた』(七五)がある。(和田義昭)

若山牧水 わかやま ぼくすい 一八八五—一九二八(明18—昭3)

歌人。本名繁。宮崎県東臼杵郡に生まれ、一九〇八年早稲田大学英文科卒業。尾上柴舟門に歌を学び、処女歌集『海の声』(一九〇八)を出版。第三歌集『別離』(一〇)で、青春の哀歎に満ちた独自の歌風を立て、歌人としての位置を高く定めた。第一五歌集『黒松』(二三八)のほか『旅とふるさと』(一六)など紀行文も多い。旅と酒、音楽的律動美の歌人としても有名で、夫人喜志子も歌人である。大正期の童謡興隆期に『金の星金の船』の斎藤佐次郎の徳憑を受けて、創刊号から大正末年まで同誌童謡欄に『秋のとんぼ』ほか五〇余編の新作を発表して誌面に変化を与え、「幼年詩」欄の選者としても創作指導に献身した。作風は素朴で山野自然の風物の世界が手堅い写実法で詠み込まれ、童謡史上看過できない功績を画した。「少年倶楽部」などにも作品を寄せ、それらは童謡集『小さな鶯』(二四)にまとめられ、『若山牧水全集』(五八)に収録されている。(滝沢典子)

柀物語 がたりもの 一つの大きな柀の中で、いくつかの物語が語られる形式の作品をいう。古くはインド説話の、愚かで学問ぎらいな三人の王子のために、賢者が王者としての教育を授けるために語った寓話をまとめたという『パンチャタントラ』(五編の書)をはじめ、『アラビアン・ナイト』などもこの形式による物語である。その中でシエヘラザードによって語られた『アラジン

と魔法のランプ』や『アリババと四〇人の盗賊たち』などは、今でも子どもたちに喜ばれる物語として残っている。また、その後の創作児童文学と何らかのかかわりをもつものとしては、『イタリアのストラパローラの『Piacvoli Noth』たのしい夜』や、『バジレの『Lo cinto de li cinti』お話のお話』などの昔話集がある。そしてこれらはいずれも、フランスのペローやドイツロマン派の作家たちに、さまざまな影響を与えた。『Lo cinto de li cinti』には『五日物語』という呼び名もある。(安藤美紀夫)

ワスネツォーフ ユーリイ・A Юриi Алексеевич Васнецов 一九〇〇—七三 ソビエトの画家。ロシア共和国のウイヤトカ(現キーロフ)生まれ。レニングラードの美術アカデミーで学ぶ。ロシア民話などをテーマとした絵本、絵画、リトグラフなど、いずれも民衆芸術の影響を思わせる温か味のある画風が特徴。『せむしの小馬』(一九三五)、『*Рабыня Дзюа*』(二七)、『三びきのくま』(三五)など多くの絵本が繰り返し出版されている。一九七二年国家賞を受賞。(松谷さやか)

和田古江 こた 一八八〇?—一九四五? (明13頃—昭20頃) 雑誌編集者。本名雅夫。大分県の出身、師範学校の卒業なれど詳細は不明。東京社発行の雑誌「少女画報」の編集長時代に、投稿された短編少女小説『鈴蘭』を採用し(二九一・七)、女流作家・吉屋信子を世

に送り出す。また、同社の「日本幼年」の編集をも担当、同誌廃刊後、あるアメリカの絵雑誌を手本にして創刊された絵雑誌「ゴドモノクニ」の編集長となり、*武井武雄、岡本帰一らの童画を普及させ、自身も童謡を書いた。一九三三年、「ゴドモノテンチ」編集長となり、数年後に帰郷、以後児童文化界より消息を絶った。

(アン・ヘリング)

和田徹三 てつぞう 一九〇九(明42) 詩人。少年詩人。北海道余市町に生まれ、一九三二年小樽高等商業学校卒。翌年詩誌「哥」を創刊、詩人としての活動を始める。「椎の木」「日本未来派」などに拠った後五六年「湾」を編集創刊。五二年日本児童文学者協会北海道支部初代支部長。六七年少年詩集『緑のアーチ』により高い評価を受ける。札幌大谷短大などで英文学教授を務めた。八四年完結の『和田徹三全集』全五巻がある。

(加藤多二)

渡辺浦人 わたなべ 一九〇九(明42) 作曲家、音楽教育家。青森県生まれ。一九三一年、東京音楽学校卒業。四一年毎日音楽コンクール作曲部門に「交響組曲・野人」で一位となり、文部大臣賞を受賞。戦前は都内小学校で長く音楽教育に当たり、戦後は日本交響楽振興財団監事、日本民族音楽協会会長として、毎年海外作曲家作品を含めた交響曲コンサートの開催に努める。八五年監修の幼児向け童謡集『赤い鳥青い鳥』

は第一六回日本童謡賞を受賞した。日本童謡協会常務理事。ほか作曲作品や著書多数。作曲家渡辺岳夫は長男、演出家渡辺浩子は長女である。

(河村順子)

渡辺三郎 わたなべ 一九一三(大2) 童画家。福島県に生まれ一九三一年ごろ上京。同舟社研究所で洋画を学び、日本水彩画会、新制作協会などに出品。

五〇年ごろより絵雑誌、教科書に執筆。ユニークなフォルムと色彩感覚で頭角を現し、サンケイ児童出版文化賞、小学館絵画賞、毎日出版文化賞などを受賞。児童文化功労者として表彰される。『おむすびころりん』(一九五九)、『べえくん』(六九)、『ねこのおしごと』(八〇)など絵本、単行本多数。美術家連盟会員。(久保雅男)

渡辺茂男 しげお 一九二八(昭3) 児童文学の創作、翻訳家。静岡市に生まれ、慶応大学文学部図書学科卒業、米国ウエスタン・リザーブ大学大学院修了後、ニューヨーク公共図書館勤務、子どもの本の実態に触れ、*ストーリーテリングを修得、帰国後は母校図書館情報学科教授。主としてアメリカの児童文学作品や絵本の翻訳を行う。絵本『かもさんおとおり』『どろんこハリー』、童話『エルマーのぼうけん』、評論『セングックの世界』などの優れた訳業がある。創作では絵本『しょうぼうじどうしゃじぶた』(一九六三)をはじめ多数、厚生大臣賞を受けた自伝的作品『寺町三丁目十一番地』(六九)や幼年向けの『もりのへなそう』

る(七二)など多様な活動がみられる。石井桃子、瀬田貞二と共訳の『児童文学論』や共著『子どもと文学』を経て新しい児童文学創造への提言を行い、評論『幼年文学の世界』(八〇)、『すばらしいとき』(八四)で独自の主張を展開した。現在は大学の職を辞しフリー。

一九七七年以来創作を続けている幼児向け絵本『どうすればいいのかな』シリーズは、幼児の心理や動作を温かいユーモアとシンプルな語り口でみごとに表現し、英独仏中その他の言語に訳出されて国際的な評価を得た。児童文学の国際交流に努め国際児童図書評議会(IBBY)副会長、JBYYの設立、IBBY東京大会(八六)開催に主導的役割を果たす。八〇年モービル児童文化賞受賞。

(松居 直)

渡辺波光 わたなべ

一八九六一—一九八三(明29・昭58)

童謡詩人。本名虎一。宮城県生まれ。ほかに青柳健哉、島影翠、谷白夜、藤波薫などの筆名がある。鉄道教習所を卒業、仙台鉄道教習所教官などを経て宮城県史刊行会に参与した。『赤い鳥』への投稿から童謡の創作をはじめ、一九三〇年、童謡集『はねつるべ』を出した。民謡、詩、短歌、民俗研究にも力を注ぎ、詩集『北方の獵人』(二九一五)、民謡集『朝霧』(二二七)をはじめ随筆集など多くの著書がある。

(畑中圭一)

渡辺文子

わたなべ

わたなべ まさこ 一九二九(昭4) — 漫画家。本名渡辺雅子。東京都に生まれ、上野学園短大退。貸本漫画を経た後、少女誌を中心にロマンあふれる少女漫画をサスペンスタッチで描き、一時代を築いた。『山びこ少女』(一九五七)、『ミミとナナ』(六三)、『はだしのプリンセス』(六六)、『サ・セ・パリ』(六七)、『ガラスの城』(六九)などの作品がある。(竹内オサム)

渡辺 温 わたなべ 一八三七—九八(天保8—明31) 明治初期の翻訳者、教育者。幕吏の父とともに長崎、下田、横浜と転々した。本名一郎、知新と号し、明治初年に温と改めた。蘭学を修めたが英学を志して文吏として維新後も英学教授に当たる。長崎師範学校長を経て東京外国語学校長、東京府会議員となり東京市の公職についた。著述に英学関係書が多いが、児童文学関係で著名なものは英文『伊蘇普物語』全二卷(七二)およ

び『通俗伊蘇普物語』全六冊(七二官許、七三刊行和綴木版一冊)は、渡米宣教師の日本語教授のためと、大衆教化に役立てる目的のための刊行であった。(滑川道夫)

渡辺与平よいたな 一八八九—一九二二(明22、明45)

画家。旧姓宮崎。長崎出身。京都の美術学校卒業後、東京の太平洋画会研究所で学ぶ。一九〇九年、同門の渡辺文子(後年の童画家、亀高文子)と結婚。一〇年、妻を画題にした油絵「ネルの着物」が第三回文展に三席で入選。二三歳で夭逝し、本格的な洋画が少ないこともあって、今日は主に出版美術の業績で知られる。洋画と俳画を織り交ぜた独特の画風の齣絵は、竹久夢二などに影響を与えたといわれる。博文館の「少年世界」「女学世界」、国学院出版部の「兄弟」「姉妹」その他の雑誌に発表した絵のうち成人向きなのは、『ヨヘイ画集』(一九一一)に、児童向きのものは『コドモ』(一一)、『愛らしき少女』(二三)に収められた。白黒の齣絵だけでなく、色刷りの雑誌表紙絵や口絵をも描き、また、巖谷小波の『笛の力』、溝口白羊の『さくら月』、小川未明の『赤い船』などの装丁・挿絵もある。

(アン・ヘリング)

和田 登わたのぼる 一九三六(昭11) 児童文学

作家。長野県に生まれ、県立長野工業高校を経て信州大学教育学部卒業。在学中に、はまみつおらと同人誌「とうげの旗」を創刊、以来小学校教師のかたわら同

誌を中心に創作活動を続ける。一九六六年、『虫』で日本児童文学者協会短編賞を受賞。本格的な活動は七〇年代以降で、作品はノンフィクション的なもの、郷土を描いたもの、少年少女小説の三つの系列に分けられる。戦時下、松代地下大本営の建設工事で犠牲となった朝鮮人労働者たちを史実をもとに描いたノンフィクション『悲しみの砦』(一九七七)は、異色の戦争児童文学でもある。映画化された『青い目の星座』(八〇)も同系列の作品。郷土に取材したものに『ちいさこべのふえ』(七二)など、少年少女の成長をさわやかに描いたものに『十二歳の旅立ち』『十二歳の岸辺で』(八一)がある。信州児童文学会会員。

(砂田 弘)

和田 誠わたまこと 一九三六(昭11) イラスト

レーター、絵本画家。大阪府に生まれ、東京で育つ。多摩美術大学図案科卒業。絵本の絵は『あな』(一九七六)、『とおるがとおる』(七六)、『せかいはひろし』(七八)、『これはのみのびこ』(七九)、『けんはへっちゃら』(八二)など、谷川俊太郎の文のものが多く、挿絵に、『ぼくは王さま』(六一)など。丸い顔の子どもや、曲線で描かれた動物たちは、どこことなくアニメーションめいた線の動きである。

(井上共子)

和田義雄わたよお 一九一四—八四(大3、昭59) 児童

文学作家。北海道旭川市に生まれ、空知農業学校中退。一九四六年から四年間、雑誌「北の子供」編集長、こ

のころ人形劇団を主宰。六一年児童文学同人誌「森の仲間」主宰創刊。北海道文学館常任理事として児童文学資料の収集や展示、さらに『北海道児童文学全集』全一五巻（一九八四完結）に力を尽くした。童話集『かぜをひいたくま』（五三）、『白い劇場』（四九）、『雪の花が咲いた』（八二）などがある。（加藤多一）

わだ よしおみ 一九二一—（大2） 劇作家、

絵本作家、編集者。本名和田義臣。福井県に生まれ東京で育つ。早稲田大学文学部中退。学生時代から劇作家を志し、はじめ商業演劇の脚本を書く。創立当初の東宝、戦後、誠文堂新光社などに勤務ののち、児童劇作家、絵本作家・制作者となる。児童劇関係の著書には脚本『あべこべ物語』（一九五二、劇団東童上演）、『脚本の書き方』（五三）などがあり、劇団東童上演の脚本『よだかの星』*では第一回読売児童演劇祭の最優秀賞を受賞（五一）、宮沢賢治原作、わだ脚色によるこの脚本は、学校演劇脚本集に掲載され、小学校や中学校で広く上演される。その後、絵本の制作に当たり、『ちんぷいぷい』（七六、若山憲絵）、『ろばのくうすけ』（七七、くぼたかし絵）、『わたしのあつこちゃん』（七八、ならさかともこ絵）、『あかべこのおはなし』（八〇、わかやまけん絵）、『もしもしプータンです』（八三、ならさかともこ絵）など多くの作品がある。JULIA出版局代表を務める。（小池タミ子）

わたりむつこ 一九三九—（昭14） 児童文学

作家。本名巨理（結婚後は池田）睦子。宮城県刈田郡白石町（現白石市）に生まれる。一九六二年東京女子大学卒業。在学中より児童文学創作を志し、卒業後、児童文学同人「バオバブ」を結成する。六三年に結婚し、その後二年間アラスカに在住する。アラスカを舞台とした『ヘイノアラスカのともだち』（一九七一）『アラスカの七つ星』として出版で七〇年に毎日新聞第二〇回児童小説に入選し、以後、『いちごばたけのちいさなおばあさん』（七三）、『おすましがあこちゃん』（七九）、『防波堤』（八三）などの作品を次々と発表。また、同人誌『バオバブ』に七五年から連載された『はなはなみんみ物語』（八〇）によってサンケイ児童出版文化賞を受賞。小人世界の争いと滅亡、復活を描いた作品で、『ゆらぎの詩の物語』（八一）、『よみがえる魔法の物語』（八二）と続き、三部作として完結している。（長戸優子）

ワツツ バーナデット Bernadette Watts 一九四

二— 絵本作家。イギリス、ケントの美術学校で学び、美しい水彩画絵本で著名なワイルドスマイスに師事、パステルを主にその華麗な画風を継いでいる。『赤ずきん』（一九六八）ほかグリム絵本が数冊に及び、ワツツ絵本の特徴を成す。また挿絵を描いた『コケッコ』（六九）、『おじいさんの小さな庭』（八五）、自作の絵本『ひとりぼっちのハンス』（六九）、『おかあさんのかえるひ』

(七五)、『毛ながのぞうトビアス』(七八)など美しい絵で愛の心を描いている。
(森久保仙太郎)

ワトキンズ=ピッチフォード D. J. Denys James Watkins-Pitchford 一九〇五ー イギリスの作家、挿絵家。イングランド中部に生まれる。少年期は病弱で家庭学習と自然を友に育つ。王立芸術大学で学び、パブリック・スクールの名門ラグビー校で美術の教師をする。少年時代から親しんでいた田舎を舞台に『あなぐまビルのぼうけん』シリーズ(一九五七―六九)や『リーパス』(六二)などをB・Bのペン・ネームで発表し、どれも本名で挿絵を添えている。『The Little Grey Men 灰色の小人たち』(四二)でカーネギー賞受賞。
(吉田新一)

笑い話 ばかい 昔話の中でとくに笑いをテーマにした話。人や動物の機知・ユーモア、あるいは愚行を話題とし、ほとんど単一のモチーフから成る。笑い話の概念規定、分類は学者によって異同があるが、愚人譚、誇張譚、巧智譚、狡猾譚の四つに分類することが妥当と考えられる。愚人譚は、愚か村、愚か智(息子)、愚か嫁(娘)、愚かな男など、愚行を話題とする。誇張譚は、いわゆるほら話。「鴨取権兵衛」のように極端に空想的な喜劇的な話。巧智譚は「和尚と小僧」のように智慧比べ、業比べのとんち話。狡猾譚は、「吉五の天昇り」「依薬師」などに代表されるおどけ者や狡猾者の話。

非現実的要素の濃い昔話に比べ、ほとんどの笑い話は現実生活に根ざし、愚か村話などは実在の村と結びついて世間話的な傾向をもつことがある。また歴史上の人物、実在の人物を主人公とするような笑い話も多く、即興的な語り方もよくみられる。
(西郷竹彦)

わらべ唄 うたべ 子どもの保持する民俗文化。童唄(歌)と表記することもある。子どもが歌う歌を総称する場合もあるが、一般的には遊びを中心とした生活の中で、親や祖父父母、兄弟姉妹、友だちなどから伝承されたり、遊び仲間によって自然発生的に生まれた子どもの遊戯歌のことをいう。近世から近代にかけては童謡と同義に使われていたが、北原白秋らが一九一八年(大7)にはじめた童謡運動以降、大人がつくった歌で創作童謡と呼んでいたものが童謡とされ、自然童謡、伝承童謡と呼んで区別していたものがわらべ唄として定着している。民俗音楽の一種であり、世界各地にさまざまなわらべ唄が存在しているが、その性格はそれぞれ地域の生活、言語、社会や文化のありように深く影響されきわめて多様である。また子どもの生活と密着しているために、生活自体が変化すれば、わらべ唄の内容も在り方も変化することになる。遊び方が変われば、そのための歌も変わり、その遊びが消滅すれば、それに関する歌も歌われなくなる性格をもっている。歌詞やメロディが変わったり、新しいわらべ唄が

生まれることも多い。その場合、伝統的な詞型や旋律を利用することが多いが、コマージュ・ソングなど子どもたちの周辺にある音楽様式を自由に取り入れることがある。伝承を基盤にしているために、伝統性が強いことは否定できないが、定型化したものではないので、定義も柔軟に考える必要がある。

【参考文献】小泉文夫編『わらべうたの研究』(一九六九 わらべうた研究刊行会)、町田嘉章・浅野建一『わらべうた』(一九八三 岩波書店)

ワンケリ スピリドン・C Спиридон Степанович

Вангели 一九三二— ソビエトの児童文学作家。モルダヴィア共和国の農村で生まれ、首都キシニョフの教育大学を卒業。小学校の先生などをした後、執筆活動に入る。モルダヴィアの農村を舞台にググーツェ少年を主人公にした詩情豊かな短編連作集『ググーツェの小さなぼうけん』(一九六七)で認められ、一九七四年に国際アンデルセン賞オナーリストに選ばれる。ほかに中編童話『野ばと村の長ぐつぼうや』(八一)など多数。(松谷さやか)